

を毛嫌いしていましたので、イエス様のことを受け入れようとはしませんでした。父にとつてのイエス様とは、大嫌いな外国人の象徴だったのです。また両親共に熱心な仏教徒であり、修行を済ませて生きながらにしてすでに戒名も持っているような人でした。

私は両親の苦勞を知りながらも傍（そば）にいることすらできず、何の手助けもできないことに苦しみ、徐々に精神に異常をきたすようになっていきました。鬱（うつ）的な症状が進み不眠症となり、その苦しみから逃れるために酒量は増え、アルコール障害的な状態へと落ち込んでいくことになります。それでもプライドが高かった私は、そのような状態を決して他人には知られないように何とかこまかしていました。そんな私を見て不安を感じた妻は自宅近くの教会に通い始め、牧師夫婦から様々なアドバイスをもらっていたようです。そのころから妻は私に心療内科への

通院を勧（すす）め、私自身も言いようもない不安を覚えていましたので、それに同意して通院することになります。その頃の私は年に一回ほど、誰とも連絡を絶つて数日間ホテルに寝泊まりしてお酒に逃げるようなことをしながら、その記憶を初めの部分から完全になくしてしまっている状態にまでなっていました。私につけられた病名は解離性遁走（かいりせい）とんそう）という聞き慣れないもので、通院の最後の頃には年に数度にまで回数が増え、医者からは「今の状態は二重人格の一步手前のようなもので、この病氣は一生治りません。奥さんが我慢（がまん）できないのであれば離婚するしかありませんね」と宣言されてしまいました。それでも何年間もカウンセリングを受け続け、精神安定剤や睡眠導入剤などが欠かせませんでした。私は薬に頼り、妻は牧師という人に頼ったのです。

私の状態が最悪となった二〇〇六年には入院、そ

れに引き続き三か月の休職も経験しました。このころには離婚も現実のものとして私たち夫婦には迫ってきており、入院中に妻から電話ではつきりと「離婚することを考えています」と宣言されました。私の意には反していましたが、その気持ちには理解できるものであり、私は受け入れざるを得ないと考えていました。その翌日、離婚するかどうかの話し合いをする事となりましたが、妻はその日の朝、初めてイエス様にすべてを委（ゆだ）ねますと心から祈ったそうです。妻は家を出るときに、教会から分けてもらった白バラが咲いていることに気づき、それを持って病院まで来ました。そのバラを挟（はさ）んで二人向かい合ったとき、どちらからも離婚のことは口からは出ませんでした。ただその咲き初めの白いバラを見つめていました。そのバラはその後入院生活の、たったひとつの希望となりました。その香りは私の脳裏（のうり）に残り、今も思い出すことができるほどで、また現在

も毎年春にそのバラが自宅で咲き始めるときに、その香りを嗅ぐことが私の大きな楽しみとなっていました。香りと共に、苦しみ、悲しみ、そして喜びを思い出すことができます。

私は、親類である水渡（みと）兄妹によって集會に導かれました。二〇〇八年二月のことです。ここで初めてイエス様に出会い救われることとなります。集い始めてしばらくしてから、中央自動車道の双葉サービスエリアで初めてベック兄とお会いし、二時間近くも交わっていただきました。私には聞きたいことや確かめたいことがたくさんありました。あれも聞こう、これも聞こうと、あらかじめ質問を準備してもいいました。でもそれと同時に、そのときの私には尻込みする気持ちが強くあり、会えば不自由なものに縛（しば）られてしまう、という怖れもありました。身構える私に対して、ベック兄は溢（あふ）れるばかりの笑顔で接してくださり、そしてたくさんのお話を話して

くださいました。お交わりの間に私が質問をぶつけることは、ただの一度もありませんでした。その必要をまったく感じなかったのです。お交わりを終えて帰宅するとき、私の心は温かいものに満たされていました。今思えば、私はこのとき初めて御霊(みたま)を体験したのだと思います。この日が私たち夫婦にとって、本当の意味での信仰生活の始まりとなりました。私は喜んで礼拝に集えるように変えられました。兄弟姉妹とお交わりを心から楽しむことができるようになりました。集いの中で、自分自身の暗闇の部分を明るみに出すことができるようになり、徐々に苦しみや不安から解放されていきました。そして不思議なことに、その一か月半後にはどうしても手放せなかった薬から解放されました。飲まなくても眠れるようになったのです。そして半年後には不思議な方法でお酒も取り上げられました。薬もお酒も、やめるための努力はまったくしていません。自然とそ

うなったとしか言いようがありません。もちろんやめたいという思いは以前から強く持っていました。が、どう努力してもうまくいかず、私には無理だとは思えなくなっていたのです。でもそうではありませんでした。イエス様の愛に触れた途端(とたん)に、私の感覚としては本当に一瞬に、イエス様の力によって薬もお酒も取り除かれたのです。人の目には奇跡としか思えないことでも、イエス様には何でもないことなのでしょう。

このようにイエス様は、私に大きな恵みをくださいました。それによってご自身の愛と恵みをはっきりと示してくださいました。私に喜びを十分すぎるほどに与えてくださいました。でもその後は、本当の意味での私自身の醜(みにく)さや罪深さが明るみに出される番でした。イエス様を知り、十字架を見上げ、みことばを受けるうちに、自分自身がどのようなものであるかが少しずつ解るようになっていきました。そ

れとともに、みことばが心に沁(し)みるようになってきました。そして愛されてなお変わることでできない自分に苦しむようにもなりました。しかしそれはイエス様への怖れに繋(つな)がるものでした。イエス様は私たちに主を怖(おそ)れる心を植え付けられます。しかし同時にその怖れから解放してくださいさる方です。聖書のみことば、兄弟姉妹方との交わり、そして祈りを通して、イエス様はそれを成し遂げてくださいました。

解離性遁走の症状は完全にはなくなっています。医者の言うとおり一生治らないのかもしれない。でも以前は恐怖でしかなかったものが、今はイエス様の御手から受けることができるようになりました。イエス様をよりよく知るための試練だと思えるようになりました。そしてこの症状に苦しんだ後には、イエス様の愛と憐れみと恵みを、それまでよりもっと強く感じるようになり、頼るべきお方はイエス様だけ

であることをはっきりと知ることができるようになりました。現在の私は、ただイエス様の憐れみにのみより頼むものであることは間違いありません。私からイエス様を信じる信仰をとってしまったら、周囲の人々をも巻き込みながら滅びの穴へと落ち込んでしまうことも間違いありません。解離性遁走の症状の苦しみは変わらなくとも、イエス様によって、それ自体は滅びに繋がるものではなくなりました。むしろ、それを通してイエス様の愛を体験できるのです。私は治らない病気から本当の意味で解放されたのだと思います。

あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自

分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けべき子らでした。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してください。たその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかに示しになるためでした。あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇るものないためです。

(エペソ 2:1-8)

心からアーメンです。

父は二〇二二年九月、十七年間続いた寝たきりの闘病生活の末に天に召されました。父が危篤だとの連絡がきたときにはもう心肺停止状態とのことでした。そのときは離れている距離を思い、もう生きている父と会うことはできないだろうと覚悟しました。長崎行きの飛行機の中で私は、父にイエス様のことを十分に話すことができなかったことを心の底から悔やんでいました。でもイエス様はそのままにはなさいませんでした。

私が病室に駆け込んだときには奇跡的に父の意識が戻っており、それから四日の時間が私と父に与えられました。集中治療室の中で、私は聖書だけを手にして、二日間父と向かい合いました。イエス様のことを話さなければならぬのに言葉が出てこない私に、イエス様がチャンスを与えてくださいました。二日目の真夜中、それまで父の心臓は何度も停止し、再び動

き出すと同時に意識は戻るといふ何とも不思議な状態でしたが、父は唐突(とうとつ)に私の方に向かって悲しそうな表情で、「伸彦、死ぬのは本当に怖かぞ」と言ったのです。その父を見たとき、私自身の怖れの心は完全に吹き飛びました。頭の中が真っ白になる思いでした。でも急いで聖書を開き、目についたことばを父に読んであげました。約二―三時間、聖書を開いては読み、開いては読む、を繰り返しながら、イエス様と天国のことを話しました。不思議なこと、に、そのときには聖書を開くと必要なことばが見つかりました。夜中の三時ごろだったと思います。ときどき眠りながらも、起きているときにはただじっと、怖いような顔をして天井を見つめてみことばを聞いていた父でしたが、急にその厳しい顔からふっと力が抜けると、本当に穏やかな顔になって私の方を振り向き、「そんなら安心したい」と言ってくれたのです。父がイエス様と天国を受け入れた瞬間でした。この瞬

間に、父には真の平安、私には大きな喜びがイエス様から与えられました。本当に私の体の力が抜けていききました。父は安心だという言葉が真実であることを証明するように、次の日は一度も心臓が止まることなくよく笑い、よく話し、父と母と私と妹の四人で平安でうれしい時間を過ごし、そして翌日静かに召されていきました。病室に涙はまったくありませんでした。日に何度も涙していた母も、今まさに召されようとしている父の耳元で、「ありがとう、お父さん」と穏やかに呼びかけただけでした。

イエス様とはいったいどのようなお方なのでしょう。この質問に対する答えとは、人が心開いた瞬間に、一方的にそして完全にご自身の愛の内に招き入れてくださり、本当の平安を与えてくださるお方だ、ということだったのです。富や栄誉をどれほど手に入れようとも満ち足りることのない人間は、ただこの方によってのみ満ち足りることができるのです。私には、

イエス様を受け入れることはできないのではないかと
思っていた父から、体験的にこのことを教えられたの
です。

今も私は相変わらずの者です。苦しみや自分に対
する恐れも、つねに持ち続けています。でも、イエス様
を思うときだけは不思議と安心できます。これは信
じられないほどの恵みであり、これ以上のものは、自
分には必要ないとはつきり言うことができます。イエ
ス様の真の愛と憐れみに心から感謝します。そして
これからもイエス様に愛され、またイエス様を愛し、
祈り歩んでいきたいと心から思います。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなた
の家族も救われます。
(使徒 16・31)

湯口 伸彦(ゆぐち のぶひこ)

一九六二年七月 長崎県佐世保市生まれ

長崎県立佐世保高等学校、

山梨大学教育学部自然科学科卒

東海大学付属甲府高等学校勤務

妻 うつぎ、長男 弘樹(ひろき)、長男の妻 智子

(ともこ)、長女 明日菜(あすな)、

次女 芽衣(めい)

主に帰れ、豊かに救して くださるから

湯口 うつぎ



右から夫の伸彦さん、うつぎさん、智子さん、弘樹さん、明日菜さん、芽衣さん

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの
知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、で
こぼこの地を平らにする。これらのことをわたしにして、
彼らを見捨てない。
(イザヤ 42・16)

イエス様との最初の出会いは、教会の附属の幼稚
園でした。何の疑いもなくイエス様の存在を信じま
した。イエス様を悪い王様が十字架につけてしまった
ことを、とても恐ろしく思っていました。その恐ろし
いことをしたのは私自身であったことを知るまでに、
長い年月がかかりました。

私が再びイエス様のもとに帰ることができたのは、
主人の病を通してでした。愛情豊かな主人は、本当
に私や三人の子供たちを大切にしてくれました。私
は、主人の優しさのゆえに、自分がわがままで自己
中心的であるという自覚はありませんでした。主人
は自分の楽しみも自由も、ずいぶん我慢(がまん)し

てきたのではないかと思います。

結婚して十年ぐらいたったころ、たまたま山梨に遊びにきていた主人の父が脳梗塞（こうそく）で倒れ、半身不随（ふずい）になりました。父の介護はとても大変で、母の心労はどれほどだったかわかりません。主人もこれからの両親の生活を思うと、不安は募るばかりだったと思います。そんな中で私は、私のわがままや、思いやりのない態度を主人に責められると、逆に猛烈に反発して、あくまでも自分を正当化していました。まず相手の都合を考える主人でしたから、自分ばかり主張する私に失望し、だんだんに、大切なことを相談しなくなっていました。両親は、半年ほど山梨で療養リハビリをして佐世保に帰っていきました。そんな私に母は、「こんなことでもなければ一緒に暮らすことはなかったのだから、良かったよ。ありがとう」と言ってくれました。この母の言葉は、いつまでも心の痛みとなつて残りました。でも、その時の私

は、それが私の罪からくる痛みであることを知りませんでした。

主人の様子が少しずつおかしくなっていたのはそのころからでした。大好きなお酒は毎日飲んでいましたが、酔い方が普通ではなくなり、朝、家を出ても出勤していなかったり、出張に行く予定が行っていないなど、私たちの間に隠しごとが増えていきました。そのうちに何日か帰ってこないということが時々起るようになりました。テレビドラマのように、夫婦のありとあらゆる問題が次々に起きました。主人は酔（よ）つていて、帰ってきてても記憶がないようでした。私が泣いたり怒ったりすると何度も謝ってくれましたが、同じことの繰り返しでした。主人に頼り切って生きていた私には、とても受け入れることはできませんでした。そんな状態が何年も続く中で、私は主人の愛情を疑い、完全に自己憐憫（れんびん）に陥（お）つてしまい、もう自分たちはおしまいだと思い始めました。その

時の主人の深い悲しみや恐怖を思いやることも、子供たちを顧（かえり）みることもできませんでした。いま思い出しても胸が痛みます。

私は、できることは何でもやりましたが、何故なのかどうすれば治るのか、何もわかりませんでした。主人は、少しずつ悪化していき、入院しました。お医者さんからは、「この病気は治らないので、こういうことは一生続きます。もう耐えられないと思うなら、離婚したほうがいい」と言われました。相談した親も友人も、当時通い始めていた教会の牧師さんも、私がそう決めるなら仕方ない、という答えでした。でも、どんなに考えても、どちらの未来にも希望がありませんでした。明日話し合いをするという夜になつても、何も決められませんでした。この時、生まれて初めて、からっぽな心で「神様が決めてください。どうしたらいいか教えてください」と祈りました。結局、朝になつても答えはでませんでした。ただ、その朝、ちょうど

咲き始めた白いバラのつぼみを見ていたら、「きれいだから主人に見せたい」とふと思いました。二人で一緒に見ることを想像したら、何故か嬉しかったのです。そして、バラの花を持って主人の病院に行つて、二人で「きれいだね」と眺めました。私たちは、何かを決心したわけでも覚悟したわけでもなく、何か解決策がみつかったわけでもありませんでしたが、何故か平安でした。たぶん、これがイエス様の答えだったのだと思います。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、
あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなた
に告げよう。（エレミヤ 33・3）

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、
あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなた
がたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あな

たがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

(ヨハネ 14・27)

一緒に生きていくということはイエス様が決めてくださったことでした。この時から、起こったことのすべての責任はイエス様がとってくださいました。

二〇〇八年、私たちは叔母夫婦である水渡兄妹を通じてキリスト集会に導かれ、二人そろって受洗の恵みにあずかりました。主人の症状は、回数こそ減りましたが、治るわけではありませんでした。でも、主人は記憶がなくなりながらも、祈りとみことばをたよりに、自力で帰ってくることもあれば、想像もしていなかった人の力を借りて戻されることもありました。イエス様に背負われて帰ってきたとしか考えられませんでした。常識的に考えればいろいろなことを失っても仕方のない状況が続きましたが、イエス様は私たち家族に必要なものは何も取り上げることはな

さいませんでした。子供たちのお父さんへの愛情も、少しも変わりませんでした。

ことが起こされるたびに、「どうしてですか。いつまでですか」とイエス様に泣いて訴えるような成長のない私でしたが、一つわかったことがあります。それは、このことがなければ、私は自分の罪を決して認めなかったということです。結婚式のメッセージで、ベック兄がよく言われます。「自分も相手も不幸になりたかったら、自分のことばかり考えていればいい」と。これは、私のことです。主人と夫婦であった時間も、子供たちを育てていた時間も、そして、主人の父が山梨で療養していた時間も、私はいつも自分にとって楽しいこと、安心なこと、都合の良いことを最優先にしていました。主人の苦しみ、子供たちの悲しみや不安よりも、自分のことを優先して考えていた私の罪はどうすれば償(つぐな)えるのだろうか、もし自分の罪を自分で償うとしたら、この程度の苦しみでは済ま

ないだろう、と思いました。償いきれない罪だからイエス様が代わりに負ってください、と十字架が私の罪のためであったことがやっとわかりました。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。

(イザヤ 55・6〜7)

イエス様と共に歩き始めた私たちには、たくさん
の訓練とたくさんの恵みが与えられました。中でも
長男弘樹の結婚は、本当に厳しい訓練の時であり、
恵みの時でもありました。結婚の話を弘樹が切り出
したのは、二〇二三年の正月でした。二人の仕事の都
合があるから、できれば四月からスタートさせたいと
のこと。心の準備もできないまま、ベック兄に会って欲

しいとか、御代田での結婚式とか、自分たちの思いを
伝えました。「結婚はイエス様と共にあって欲しい」と
いうのが、私たちが子供の結婚に望む唯一の願いで
す。弘樹は、「神様のことは、どんなに考えてもよく
わからない。御代田でするような結婚式は僕にはで
きない」と言いました。イエス様に従うとはどうする
ことなのか、悩みました。夫婦で一致することもでき
ず、重苦しい毎日が続きました。ただ、「この結婚が
みころなら、どうしたらよいかわか教えてください。み
ころでないなら閉ざしてください」と祈りました。

弘樹は、「お父さんたちを悲しませる結婚式はし
ない」と言い、四月の入籍に向けて、準備を始めまし
た。私たちの信仰のことは、弘樹がお相手の智子さん
やご両親に伝えてくれました。智子さんも、仙台から
山梨まで日帰りで会いにきてくれました。その時、
初めて会った智子さんを、何故かとてもいとおしいと
思いました。これは、私ではなくイエス様からきた感

情だったでしょう。時間のない中で、山梨、福島、仙台との行き来も、家族全員の都合も整えられて、三月の終わりに両家の家族そろってお祝いの家族旅行をしました。その前日に届いた智子さんからの手紙には私たちへの感謝の気持ちが溢(あふ)れていました。その日はちょうど、私たちの受洗記念日でした。主の憐れみに心から感謝しました。手紙のお返事に、主人が次のみことばを選んでくれました。

私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。
(1ヨハネ 4・19)

私たちは、負わせる必要のない重荷を二人に負わせてしまいました。大きな恵みを感謝して受け取るだけで良かったのだ、と知らせられました。

神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命

令は重荷とはなりません。

(1ヨハネ 5・3)

子供たちの救いはイエス様のお約束です。それがいつなのか、どのような方法なのかは私たちにはわかりませんが、イエス様がもうすでに計画を立ててくださっていますから安心です。

以前、問題が起きてベック兄に相談に行った時、ベック兄は一言、「どんな問題もイエス様のところへ持つていかなければ悲劇的です」と言われました。起こされたことの重大さや深刻さではなく、解決の方法をどこに求めるかが問題であったことに気づかされました。私自身は、歳をとっても、どのような訓練を通して、良い妻にも良い母にも変われません。でも、だめな私を導く最良の牧者であるイエス様がいてくださいます。イエス様は、大きな問題はもちろん、日常のどんなに小さな問題にも、最善の解決策を持つておられます。祈って、信頼して待っていれば、そのこ

とを体験できます。このようなものでも決して見捨てずに、一緒に歩いてくださるイエス様に感謝します。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。
(1コリント 2・9)

主があらしを静めると、波はないだ。波がないだので彼らは喜んだ。そして主は、彼らをその望む港に導かれた。彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。
(詩篇 107・29-31)

湯口 うつぎ(ゆぐち) うつぎ)

一九六〇年七月 長野県松本市生まれ

長野県立須坂高等学校、山梨大学教育学部教育科学科卒

高校非常勤講師

夫 伸彦(のぶひこ)、長男 弘樹(ひろき)、長男の

妻 智子(ともこ)、長女 明日菜(あすな)、次女

芽衣(めい)

イエス様にしていたただいたこと

湯口 芽衣



右端が芽衣さん、集会のみなさんと

私がイエス様に出会ったのは小学校三年生のころです。その前から母は教会に行っていたのですが、私は牧師さんがくれるかわいい「みことばカード」をもらうため、ときどき顔を出すくらいでした。初めて伊那集會に集ったとき、それまでとは違う雰囲気戸惑いました。そのときはよく覚えていないのですが、ただ伊那集會の兄弟姉妹に笑顔で迎えられ嬉しかったこと、は記憶にあります。それから毎週日曜日は礼拝の日になりました。しばらくして、当時伊那集會に集っていた山田由美姉妹から聖書を読みました。そこで初めて引いたみことばが、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ 3・16)でした。このみことばの意味はわかりませんでした。でも、ただただ嬉しくて、それからヨハネ 3章 16節が一番好きなみことばになりました。

イエス様は私にたくさんのことをしてくださいました。小学四年生のとき、私は大きな怪我(けが)をしました。体育の授業中、跳び箱で閉脚跳びをしたとき、足が引っ掛かって腕から落ちたのです。すぐに近くの病院に運ばれ、手術が必要ということで県立中央病院に運ばれました。手術は全身麻酔になるので、全身麻酔ができるかどうか、たくさんさんの検査にまわされました。普段なら一つひとつの検査の待ち時間がとても長いのに、そのときはすべてが整えられ、検査、手術とスムーズに進みました。これはイエス様のおかげだったと思います。

中学二年のころには、私はクラスの会長をしていました。しかしクラスがまとまらず、男子からはひどい暴言をはかれ、教室にいるのが嫌で何度もトイレに駆け込みました。そんなときは決まって泣きながらイエス様に祈りました。トイレは私のお祈りスポットでした。

私が最もイエス様に助けられたのは、中学三年生の

ときです。私の中学校では、修学旅行に座禅があります。事前に、私はクリスチャンなので座禅はできませんと先生に伝えてあったのですが、いざ座禅のときになってみると、お坊さんや先生たちの目が痛くて、一人で泣きました。私の心の中にイエス様がなければ耐えられない場でした。宿舎にもどったあと、私はクラスの集まりに遅れて先生に注意されたとき、心の中のモヤモヤが爆発し、反抗的な態度をとってしまいました。部屋に戻ったあと担任の先生に呼び出されて、「さっきの態度の原因は座禅か」と聞かれました。私がイライラもあつてうまく答えられないでいると、「芽衣の他にも学年でクリスチャンはいる。でも、その人は皆に合わせて座禅をしたよ」と言われました。同じ学年にクリスチャンがいたのだという喜びと、でも、その子は自分とは違うという思いとが頭の中をぐるぐると回って戸惑いました。「私の友達にもクリスチャンはいるけど、それは自分の信仰で、合わせるときには合わせているよ」とさらに続けられ、

私はただ「それとは違う。自分からは何も言えませんが」と伝えることしかできませんでした。最後には「あなたは仏教を否定している」とまで言われました。先生が怒って「もういい」と言うまで、そんな会話を続けていました。そのあとすぐにトイレに駆け込んで、泣きながら「イエス様助けてください」と声に出して祈りました。そのときの私にとって、祈ることが精神安定剤でした。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

(詩篇 50・15)

しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行ないなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。

(ルカ 6・27、28)

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4・18)

恐れないうで、ただ信じていなさい。(マルコ 5・36)

面接の前に何度も読み返し、不思議と緊張感はありませんでした。本当に楽しく面接をすることができました。しかし、帰りの車で面接中の口頭試問に正しく答えていなかったことに気づき、車の中でまた泣きました。いつもなら、決まってそこで祈るんですが、このときは素直に祈ることができず、このあと一週間は荒れました。本当に悔しくて毎晩泣きました。前期入試の合格発表の日が近づくと不安で、一人ではどうすることもできなくなりました。そのときふと目に入ったのが小学校のときに集めていた『たいせつなきみ』という絵本でした。そのときに一番心に

このみことばを与えられたとき、私は「先生のためには祈れない」と思いました。そのときは自分のことで頭がいっぱいで祈ることができなかったし、お母さんと一緒に祈ったときは、少しはそのような祈りができませんでした。一人でいるときは真剣に先生の救いを祈ることができませんでした。それが少し後悔しているところでもあります。

そして、中学校生活一番の山場である高校入試でもイエス様は私にはたらいてくださいました。山梨は前期入試、後期入試に分かれていて、私は前期入試を受験しました。前期入試の前にたくさん兄弟姉妹からみことばをいただき、それをお守りにして受験会場に持つて行きました。そのときのみことばです。

人の道は主の目の前にあり、主はその道筋のすべてに心を配っておられる。(箴言 5・21)

残った部分は次のとおりです。

『氣にすることなんかありません。お星さま(のマーク)やだめじるしをつけていったのは、いったいだれだい？みんなおまえと同じようなウイミックスじゃないか。みんながどう思うかなんてたいしたことじゃないんだ。パンチネロ。もんだいはね。このわたしがどう思っているかということだよ。そしてわたしはおまえのことを、とてもたいせつだと思っている。』

イエス様はどんな私でも本当に大切に思ってください、ことをあらためて知り嬉しくなりました。そこで初めて素直に祈ることができました。そのあと私は無事前期試験に合格したことを知り、ほんとうにイエス様に感謝しました。入学前の理数クラスの試験でも、ボロボロだったにもかかわらず合格することができました。本当に不思議なことでした。

この希望は失望に終わることがありません。なぜな

ら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(ローマ 5・5)

私の中学校生活は、トイレに駆け込んで泣いて祈ることの繰り返しでした。何度も何度もイエス様に頼りました。イエス様はどんなときでも私のそばにいて助けてくださいます。ほんとうに感謝します。

高校に入ってから、そんなイエス様から少し距離をおいてしまいました。今では困ったときのイエス様状態です。そんなときにこの証しの話をいただき、本当にイエス様は私を離されないなと思いました。これを機会にまたイエス様と向き合って高校生活を送っていきたいです。

イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話されました。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものであります。」

いま飢えている者は幸いです。あなたがたは、やがて飽くことができますから。いま泣いている者は幸いです。あなたがたは、いまに笑うようになりますから。

人の子のために、人々があなたがたを憎むとき、また、あなたがたを除名し、はずかしめ、あなたがたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。

その日には、喜びなさい。おどりがたうて喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいからです。」

(ルカ 6・20-23)

湯口 芽衣(ゆぐち めい)

一九九八年六月 山梨県甲斐市生まれ

山梨県立甲府南高等学校在学中

家族：父 伸彦(のぶひこ)、母 うつき、

兄 弘樹(ひろき)、義姉 智子(ともこ)、

姉 明日菜(あすな)

いのちの光を持つ者へ

黒澤 鍊二



左から長男の元さん、妻の環さん、鍊二さん、次男の雄さん

それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待つておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。

(イザヤ 30・18)

私は、教員として勤務し始めて八年目に、環姉妹との結婚を通してイエス様を知ることになりました。この時に主は、私のために立ち上がられたのです。

1 二つの勘違い

私は、小さいころから天文や生物が好きで、科学全般に興味がありました。顕微鏡で観察して微生物の神秘に触れていました。高校では、さらに化学に興味を湧き、「生命の起源」について研究したいと思い、化学を専門とする大学に進みエンジニアを目指しました。「この世のすべての問題は科学が解決する」という思いがあったからです。

しかし、大学三年時に父の会社が倒産して生活が不安定になりました。奨学金を二つ借りて、アルバイトをしながら、研究したさに家庭が大変なのを顧（かえり）みず、自分の思いを通して大学院まで進学しました。でも、研究は成果が出ず、研究そのものに絶望を感じました。大学に残って研究したいという思いはあったのですが、このままでは生活は成り立たず、ならば「つぶれない会社」に就職するという観点から公務員を志望しました。公務員試験をいくつかチャレンジしましたが、唯一合格したのが教員採用試験でした。

私が初任で勤務した学校は、東京都の郊外にある公立中学校でした。就職当時は、昭和五十年代のいわゆる校内暴力が真つ盛りの時代でした。呑気な私はそのようなことはまったく考えておらず、勤務校でその現状を目の当たりにして少なからず驚き、何ができるかを考えさせられました。学校の方針としては、生徒の活力を健全に消費させるために、部活動を奨励

していました。どの部活動にも実績を出す一流の顧問がいて、生徒指導を兼ねて熱心に指導していました。

私は、中学時代に若干の経験があった卓球の顧問として指導に携わりました。生徒の意識は高く、指導し始めると面白いように上達して、結果も出るようになってきました。二年目に市内大会で入賞し、三年目には都大会出場。四年目には都大会ベストエイト。五、七年目には三年連続関東大会に出場し、特に七年目には全国大会に出場するなどトントン拍子でした。その効果は、授業や学級経営にも及び、卓球を指導することが自分にとっても生徒にとっても一番いいことだという価値観が成立しました。このことは、自分は「良い教員になった」と高ぶらせることにもなりました。この時を思い返すと、私は自分の力を過信する者であり、まさに破滅に向かつてまっしぐらに進んでいた時期だったとつくづく思います。

このように「この世は科学が万能である」と「自分

は優秀な教員である」という二つの大いなる勘（かん）違いと高ぶる思いが交錯する中で、妻となる環姉妹と出会いました。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終

わりは死の道である。

（箴言 16・25）

環姉妹とは、中学校の卓球部を指導する顧問どう

しで、両校はライバルでもありました。環姉妹のことは、卓球部の顧問として知ってはいたものの、特に気にしていませんでした。意識したきっかけは卓球部の直接対戦でした。その年、私のチームは都でも上位の力を持ち、四年連続の関東大会出場候補として名が上がつていました。姉妹のチームとはそれまで何回か対戦して勝っていましたから、まったく負ける気がしていませんでした。でも、関東大会を決める一番大切な夏の都大会で、自信のチームはなんとあっけなく負けて

しまいました。大きなショックでした。「優秀な指導者」という城が崩れた気がしました。このことから、良いチームを作っている姉妹に興味が湧（わ）きました。この出来事を通して、主が働かれたのでした。

高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。

（箴言 16・18）

姉妹に声をかけ、会う中で、聖書のこと、信仰のこと、イエス様のことを知りましたが、その時は半信半疑でした。科学が万能であると信じていた私にとっては、すべては不思議な世界であり、嫌いな世界観でした。ですから、始めは「私は遠慮するけれど、あなたが信じていくことは構いません」というスタンスでした。

ある日の家庭集会で、某兄弟に「科学を勉強していたの。でも、科学も宗教ですから」と言われ、大変ショックな思いがしました。私は宗教を一番嫌っていました

が、結局のところ、私は科学という宗教を信じていたということを知らせられました。科学でなんでも解決できるという思いが、科学を崇拜することにつながっていた、自分は間違っていたと思うようになりました。

さらにこのころは卓球指導による生徒の育成にも限界を感じ、より上位の大会に出るという価値観に疲弊（ひへい）感があつた時期でもありました。

このように、それまでの生活の中で、私が誇りとして思っていた二つのことが、簡単に崩されたわけです。聖書をもとにした考えで生徒指導ができるのなら、路線変更も良いのではないかと二つの方向性が見えてきたように思えました。主に降参せざるを得ない形でした。

ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

（詩篇 20・7）

2 主が導く方向へ

こんな調子ですから、確かな思いがあつて信じたわけではなく、救われたというもののイエス様からまだまだ遠い者でした。イエス様の愛を感じる感性を持ち合わせていない私は、救われてもなお、それまでと同様の生活に流されていました。相変わらず部活動をして、ただ厳しいだけで生徒にも愛のない者でした。「へえ。お前はクリスチャンなんだ。あまりそのようには見えないな」と同僚にもはつきりと言われてしまうありさまでした。

でも、徐々に私へのイエス様の関与が示されるようになっていきました。二校目に異動した時から、卓球部に生徒が集まらなくなることが起こり始めました。「指導者は立派でも、生徒がいなくてはなんにもならない」と陰口を叩かれながら悔しさでいっぱいでした。また、勤務においても責任ある仕事に抜擢（ばってき）されたり、卓球部に関しては大会運営管

理の役に携（たずさ）わつたりと、自分の思いとは違う方向に回転し始めました。今から思うと、私の生活を変えるためにイエス様がなされたことだったので、当時はなぜこんな事態になるのかと、煮え切らない気持ちでした。

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」

（ヨハネ 13・7）

家庭生活でも、子供を授（さず）かり、分担が出てくると、必然的に徐々に熱心な卓球指導から遠ざかっていくことになりました。子育てはトラブル続きで、思ったようにならないことにイライラ感も多分になりましたが、そんな気持ちから、姉妹とともに祈る生活へと導かれました。

3 自我が碎かれる時期

三校目は、小さい学校でしたが、生活指導に困難なことが多く、苦慮する場面に突き当たりました。祈らざるを得ない日々でした。生徒について祈りながら一日を始める生活になりました。

四十歳を過ぎたころから、管理職受験への声がかかり始めました。あまり積極的な気持ちはなかったのですが、同僚の誘いもあり勉強会に参加しました。勉強会に出てもあまりピンと来ず、管理職になることになるとかなりの迷いがありました。信仰の兄弟に相談してみると、その兄弟からは「とにかく祈ること。そして、受験の道が備えられているのなら受けてみれば良いじゃないか。主は、あなたに必要なものなら絶対に与えないよ」との言葉が示されました。受験するにせよ、倍率も高いし、そう簡単には受からないという気持ちもあり、祈りつつ挑戦してみました。しかし、高倍率でありながら、早期に合格してしまいま

した。そのこと自体に驚きながらも、自分が認められたことを喜び、主の御心として受け止めて教頭になりました。

しかし、管理職とはいえ教頭としての生活は決して平坦ではありませんでした。当時は教員の既得(きとく)権が整理され、教育委員会が管理体制を強める時期でした。それまでは、教員個人のやり方が尊重され、その分自由に主張し活動してきた時代が長く続いていました。そのために新たに出来る方針に対する反発はかなり大きなものでした。世間を騒がせた「儀式での君が代、日の丸問題」など、管理職が現場で矢面に立ち、教育委員会の意向に沿った学校運営の実施を余儀なくされていました。特に私は、その主張が最もはつきりしている地区に配属されたのでした。上から降りてくる方針に基づいて成し遂げることで評価され、できないと教育委員会から度重なる指導を受けることになり、気が休まることは

ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。

(1コリント 15・10)

教頭・副校長の時代は十年に及びました。通常五、六年のところを、私はその倍の時間を過ごしたので、簡単に教頭になったことも、後戻りできない厳しい立場に私を置いて、そこでの生活を長期にわたり味わせることが、主の目的であったことがよくわかりました。モーセが荒野でさまよった四十年のごとく、私には必要な十年間でした。私の高ぶる心、自我を砕くには、それほど時間が必要なことをイエス様はご存知だったのです。

また、その十年間の内の半分は、厳しい環境の学校に勤めました。それは、「特に生活指導を要する」と公の機関で判断された生徒が、親元を離れて寮生活をする福祉施設の中に併設された学校でした。児童相談所や法律によって措置(そち)されてきた生徒は、

ありませんでした。生徒は落ちついていましたが、教員の反発は大きく、決心が曖昧(あいまい)な中で教頭になった私は、教員をいかに説得していくか、あるいは強引に推し進めていくべきかの狭間(はざま)に立つて、悩みは尽きませんでした。「イエス様、この生活はなんなのですか?」と愚痴(ぐち)をこぼす日々でした。「自分は優秀な教員だ」などという思いはどこかに消し飛び、感情を押し殺してただ淡々と仕事をこなすことが最良と思える日々を過ごすことになりました。

そんな中にもイエス様がいてくださり、祈ることの必要性をさらに示してくださいました。祈ることで、事態は変わらないものの、平安に導かれる経験を重ねることができました。いろいろの困難な体験を通して、主は祈りを聞いておられるという実感を徐々に持つようになっていきました。

大人への不信感や心の傷をかかえています。そんな子供たちを、教育を通して将来の自立へと助けることが学校の役割でした。生活指導に重きを置く学校にまたもや配置されたのでした。でも、日曜礼拝は守られました。主は、私に必要なものをよくご存知でした。自分の思いが大切なのではなくて、主のことを第一に考えることを優先されるということを知りました。

荒(すさ)んだ状態で入ってくる生徒に、いかに学習に興味を向かせるかで、大いに悩みました。生徒が置かれていた環境は厳しいものばかりで、それを聞くたびに押しつぶされそうな気持ちになりました。だからこそ、できることは生徒一人ひとりのために祈ることでした。祈りは真剣(まけん)にならざるを得ませんでした。

そんな時に、集会では中高生会での奉仕に導かれました。始めは、自分の子供もお世話になっているからという気持ちで引き受けましたが、その奉仕を通

して、そのことは自分のためであるとわかりました。自分の信仰が育つために主が用意してくださったものでした。祈ってはいいたものの、普段から聖書にも触れず、安穩（あんのん）と過ごしていた自分のために主が与えられたものであると示されました。仕事では荒んだ生徒を見る機会が多かった分、中高生会に集う子供たちと触れ合うことで心は癒（いや）されました。純粹な信仰に触れ、高ぶった思いの信仰を悔い改めるべきことを示されました。また、若いスタッフの献身的な奉仕にも触れることができて、自分の信仰の歩みを省みる機会となりました。信仰は、組織ではなく個に帰するものであるということや、年齢にはまったく関係ないということが示されました。これらのことを通して主は、勤務校での生徒指導でも、受け入れる余裕を与えてくださいました。

私の自我は堅く、碎かれるのに時間がかかり、多くの経験が必要でした。苦難を通して、主との交わりを

多く体験することができ、主への信頼を蓄積していきました。主の恵であつたと言い切ることができました。

あなたがたのあつた試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。

（1コリント 10・13）

4 今も何も変わっていない自分

その後、学校を任（まか）される立場になり四年を迎えておりますが、自分がやるのではなくて、主がやってくださっていることを感じ、日々感謝して祈りに覚えています。仕事での日々のトラブルは尽きず、判断や対応に迫られる毎日ですが、いつもそのあとには祝福が見えてきますから感謝です。突然振りかかる出来事で心が揺れることもあります。祈ることや平安へと導かれますから感謝です。厳しい事態に置かれるこ

ともありますが、主に信頼をすることを体験できま
すから感謝です。平安な日は三日と続かず、すぐ萎
てしまう者ですが、必ず脱出できますから感謝です。

とはいうものの、あいかわらず高ぶりは治らない者
です。自分の判断を優先する者ですが、悔い改める
機会がいただけますから感謝です。すべて足りない
ところは主が補ってくださいますから感謝です。自分
自身は何も変わらないのですが、心を落ち着かせて
臨む時に、主が示してくださいますから感謝です。

イエス様が十字架で死なれたのは、私の数限りない
罪を背負ってくださいるためであり、贖（あがな）ってくだ
さるためであることも感謝です。イエス様の血潮が
なくては何もできない者です。そのことを知らせて
くださいました。

毎日、姉妹と祈りながら一日が始められますから
感謝です。主を待ち望む者には幸いを授けてくださ
ることを約束してくださいますから感謝です。

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の

光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むこと
がなく、いのちの光を持つのです。」（ヨハネ 8・12）

主からの約束は真実ですから感謝します。これか
ら主に拠（よ）り頼み歩む者であることを感謝し
ます。

黒澤錬二（くろさわれんじ）

一九五五年 東京都杉並区生まれ

都立井草高等学校卒、日本大学理工学部卒、日本大
学大学院理工学研究科博士前期課程修了

東京都公立中学校校長

妻・環（たまき） 長男・元（はじめ）

次男・雄（たけし）

「グッド・ニュース」を多くの方へ

黒澤 環



お父様の水沢竜夫さんと

1 滅びへの道

私は教員の両親と三歳年上の姉の四大家族で育ちました。こだわりが強く、わがままに小学生時代を過ごしました。中学生になると自分を抑えることを覚え、楽しい中高生活を送りましたが、部活動、生徒会と様々なことを通して、自分の能力の限界を感じ、大學生になると遊んで過ごすようになりました。母に嘘（うそ）をついたり、周（まわ）りの人に心ない言葉を言ったり、自分がどんどん悪くなるのを感じ、明日は良い人間になろうと思っても、次の日はまた高ぶりと傲慢（ごうまん）の連続でした。

2 十字架との出会い

大学二年を終えた時、イギリスへ二年間の語学留学をしました。自分は変えられるかもしれないと期待していました。

充実した留学生活が半年経ったころ、ケンブリッジ

主の憎むものが六つある。いや、主ご自身の忌みきら
うものが七つある。高ぶる目、偽りの舌、…

（箴言 6・16～17）

に引越しました。引越した後、他の部屋を借りている日本人の方にあいさつに行くと「僕は聖書の神様を伝道しています」と言われました。咄嗟（とつさ）に逃げようと思いました。しかし、その男性に「あなたは何をしているの？」と聞かれ、「英文学です」と答えました。すると「聖書を読まなくて英文学がわかるの？」との問いかけに、ちよつとむつとした私は「それでは聖書を貸してください。読んでみます」と言つて、一冊借りて部屋に戻りました。

翌日、「聖書はどうだった？」と聞かれたので、「ありえないことばかり書いてあり、おとぎ話のようですね」と言うと、男性は「神様はなんでもできるのです」と言いました。また、「あなたの罪が、この『聖い書』を読ませなくしているのです」と言いました。こんなことを言われたのは初めてでした。すかさず「罪ってなんですか？」と聞くと、聖書を開き見せてくれた言葉に私の目は釘付けになりました。

「これ、私です！これが罪なんですか？それなら私に罪があることがわかりました。では、どうすればいいんですか？」と尋（たず）ねると、男性は言いました。「あなたの罪の身代わりとなって、イエス・キリストは十字架に架かつて血を流して死なれたのです。悔い改めてイエス様を信じれば、これまでの罪はすべて真（ま）つ白にされて、神様はあなたの罪を忘れてくださる、と聖書に書かれています」。罪が真（ま）つ白に消されるとは。イエス・キリストの十字架は私のためであったのか。私の身代わりとなって苦しまれたのか。驚きと感謝の思いが溢（あふ）れました。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたの

そむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

(イザヤ 43・25)

新しい学校では、イタリア人の女の子からいじめを受けました。毎日泣きながら帰宅し、聖書を読み、いじめがなくなるよう祈っても、状況は変わりませんでした。そんな時、聖書を紹介してくれた男性から大学講内で持たれているバイブルステディに誘われ、行ってみるとそこにはもう一人の日本人男性がいました。ケンブリッジ大学博士課程で立派な成果を出されている研究者でした。イエス様と出会う前のご自分の過去を話されるのを聞き、「この方がイエス様と出会うて幸せな人生に変えられたのなら、私もきつと変えていただける」と思いました。

イエスは：言われた。「：わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

(マルコ 2・17)

私が、高ぶりと嘘で母を泣かせたと話すと、「謝(あやま)りの手紙を書いて、イエス・キリストがこのような思いを与えてくれた、と書くといいでしよう」と勧め(すす)めてくださいました。早速、帰宅すると手紙を書いて送りました。素直な謝りの手紙を読んだ母は「環(わ)が変になった!」と心配し、冬休みに姉がイギリスまで様子を見に来てくれたほどでした。

次に、人を許せない時はどうしたらよいかと私は尋ねました。クラスのイタリア人のことでした。すると「人には人を許すことなどできない。許したと思っても、また思い出してしまふ。でも、あなたの真つ黒な罪を真つ白に変えることのできるイエス様は何でもできるので。三つのFを祈つてごらんなさい。その人をForgive(許し)、Forget(その人のしたことをすべて忘れ)、Forever(永遠)に思い出さない、そのようにしてください、と。祈つたら、もう祈りはきかれたと信じ、また、相手の祝福も祈るのです」。私は

わらにもすがる思いで、帰宅するとまず、それまでの自分の罪を思い出せる限りイエス様に悔い改めました。こんな者の罪を赦すために十字架で血を流され死なれたイエス様。心から感謝しました。そして「三つのF」と「彼女の上に祝福」を祈りました。翌朝は「もう祈った」と清々(すがすが)しい思いでした。そしてその日以来、彼女のことが気にならなくなり、不思議と私への意地悪もなくなりました。イエス様に感謝しました。

一ヶ月後、友人たちと食事をしてた中に彼女もいました。別のイタリア人の子が私にイタリア語を教えて「あの子に言うておいで」とニコリ言うのです。言われた通りにすると、あの子は「わかつてるよ、タマキ。ごめん。許して」と泣き出してしまいました。私は慌(あわ)てて元の子のところに戻り、言葉の意味を尋ねると「アイアムアグッドガール」と教えてくれました。私ははじめられていることを誰にも話していませんで

したし、その言葉を教えてくれた子は他のクラスでした。イエス様のなされたことだと思いました。彼女とは仲直りしただけでなく、すっかり仲良くなり、帰国の時はお互い泣いて別れを惜しみました。ここまで面倒を見てくださるとは。この神様から離れたくない、と思いました。

イエス様に救っていただくのに、お金も努力も必要ありませんでした。ただイエス様を信じることで一方的に罪の赦しと恵みをいただきました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

(エペソ 2・8)

これはまさしく「福音」『「グッド・ニュース」でした。この本物の神様を多くの方にお知らせしたい、と思いました。

3 集会への導き

ケンブリッジの教会では導かれるままに祈り、賛美し、心から神様を礼拝しているのを感じました。しかし、帰国して近くの教会に行くと、礼拝のプログラムがあり、歌う賛美歌も祈る人も決まっていました。牧師さんから、何か質問は、と言われたので聖書の質問をしたところ、牧師さんが突然「あなたはバリサイ人です！」と怒り出しました。教会に行くのが怖（こわ）くなりました。

半年後、お会いしたことのない方が電話をくださり、「吉祥寺にベックさんという方がいらつしやるから行ってごらんさい」と教えてくださいました。早速日曜日に出かけ、ベックさんにご挨拶すると、大きな手で握手してくださり、同い年の姉妹を紹介してくださいました。皆さん喜びに溢れてニコニコしていました。ケンブリッジの時と同じように、導かれるままに礼拝が捧（さ）さ（げ）られていたのを見て嬉しくなりました。わから

ないことがあれば、紹介された姉妹に聞くと何でも答えてくれました。感謝でした。ここに集い続けたいと思いました。神が唯一なら、イエス様は神の子であつても神ではないのだろうか、と不思議に思ったことも、ベックさんが「犬の子は犬でしょう。神の子は神でしょう」と実にわかりやすく話されるのを聞いて、すぐに霧が晴れました。

集会に来て、宗教と信仰が違うこと、天と地を造られた神様への信仰を持ったことを知りました。葬儀に出たことで、死は終わりではない、永遠のいのちも確信できました。大学の図書館に、真理はあなたがたを自由にします、と書かれていましたが、イエス様のことを知るたびにその言葉が思い出されました。集会に集い始めて半年後の二十二歳の春、洗礼を受けました。聖書のみことば、御霊（みたま）の導き、イエス様を信じる兄弟姉妹との交わりと祈り、これらを通してイエス様は多くのことを学ばせてくださり、恵みと喜びをくだ

さいました。心の穴にすっぽりとイエス様が入ってくださったように、私の心は満ち足りることを知りました。

4 結婚への導き

結婚してもいつかは裏切られるのではないか、と思っていました。しかし、二人が、永遠に変わることのないイエス様を見上げていれば大丈夫と聞いて、もしかしたら私にも結婚が与えられるかもしれないと思い、祈り始めました。

大学卒業後、中学校教員になると同時に卓球部の顧問となりました。先輩の先生に恵まれ、多くのことを教わりました。しかし休みは年間通じて十日位、日曜礼拝に行かれないことが悩みでした。祈っても顧問の仕事は取り去られませんでした。

三年目の夏、このチームに勝てば関東大会へ行かれるかもしれないという試合で、相手校ベンチには恐い顧問がいました。そのチームに勝つことができ、生徒と

大喜びしました。後日、その顧問（鍊二さん）から食事誘われ、結婚へと導かれたのですから、神様のなさることは実に不思議です。最初の食事では、私はイエス様を信じていますと話しました。次に会うとイエス様を信じたきつかけを聞かれ、証ししました。集会へお誘いすると「行きます」と言ってくれましたが、家庭集会や礼拝に行っても「わからない」の一言でした。結婚については、同じ信仰に立って、と祈っていましたが、ある時は、「結婚後に救われるのかもしれない」と思ったことがあります。しかしその後、「神が導かれている結婚なら、どうして結婚の前に救うことがおできにならないだろうか」と御霊が教えてくれました。妥協した考えを悔い改めました。

二ヶ月後、家庭集会で鍊二さんの心が開かれ、後日ベックさんとお交わりをいただき、信じる者へと変えられ、結婚へと導かれました。イエス様に共に祈って一日を始められることは、とても嬉しいことでした。恐い、

と思っていたのが嘘のように、主人が優しい心の持ち主であることはすぐにわかりました。私のようなわがままで失敗だらけの者に、最善の夫です。イエス様の奇跡そのものと感謝しています。男の子二人が与えられ四人家族になりました。

5 家庭集会

両親と姉家族が同居していて、私たちは車で三十分くらいの所にマンションを購入し住んでいました。ご近所の方々が信仰に導かれ、小さな交わりを持つ機会が幾度か与えられましたが、手狭(てぎま)な我が家では人数に限りがありました。一人の人が「祈っていたら人数を気にしなくても大丈夫な家がイエス様から降ってくるわよ。祈りましょう」と輝いた顔で言いました。主に期待して祈ることは喜びです。

二〇〇四年冬、母が意識を失い急に亡くなりました。「ありがとう」「すまないわね」とよく言う母でし

た。母の突然の死は口に表せないほどの驚きでしたが、「天国で、イエス様と一緒にいる」という確信が与えられて、安心でした。

見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。
(イザヤ 43・19)

昼間一人になる父が気がかりで、私は毎日実家に通いました。帰宅後、慌ただしく子供たちの世話をするという日々が続くうちに、主人が実家の近くにアパートを借りて住もうか、と提案してくれました。バブル終盤に買ったマンションは極端に値が下がり、売ってもかなりのローンが残るため、売って引越すことは考えられませんでした。父に話すと、「もしこの家を建て替えたら、お前たちは一緒に住むか?」と父が聞きました。驚きでした。父は以前から「わしの生きている間はこの家は絶対に建て替えない!」と宣言していた

からです。

父、姉家族、我が家、三世帯住宅を建てることになりました。まったく思いがけない展開でした。祈りがこのような形でできたのか、と思いました。主に用いていただけたらと祈りながら、家庭集会で使っていただけの間取りを考えました。ベックさんにお話すると「まずお父さんに、家庭集会をさせてもらいたいのだけど、いいですか?と聞いてもらなさい」と言われました。はっとしました。父に許可をもらうことはまったく考えていませんでした。だめと言われたらどうしたらよいのだろう、と不信仰な思いにとらえられ、悔い改めました。思い切つて聞いてみると、「そういう大勢の人が来る時のために、私の部屋は広めにしたんだ。私の部屋もどうぞ、使つて」と言われました。びっくりしました。父にお礼を言いつつ、主に、心から感謝しました。

主よ。あなたのみわざはなんと大きいことでしょう。
あなたの御計らいはいとも深いのです。(詩篇 92・5)
次に、建築会社の人が、神主さんと呼んで地鎮祭をしてください、とおっしゃいました。次のみことばが与えられました。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。
(詩篇 127・1)

祈りました。「主イエス様、あなたの祝福が必要です。どうしたら良いですか?」。父に、「神主さんの代わりに、宣教師さんに無事に家が建つよう祈ってもらうのはどう?」と聞いてみました。すると、しばらく考えてから「知り合いの神主さんもないし、いいよ」と言ってくれ、姉夫婦も認めてくれました。感謝でした。祈り、賛美、メッセージ、お茶とお菓子のお交わりが持たれ、皆が

笑顔の起工式、ひたすら主に感謝しました。家を建てるとは大きな買い物で、不安、問題が次々とわき起こりましたが、主が建ててくださるとは何と感謝なことでしょう。一つ、主が導いてくださいました。

あなたのしよとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。
(箴言 16・3)

家が完成し、国立谷保家庭集会として使っていただくようになりました。父も家庭集会に参加してくれます。主のみ恵みに心から感謝しています。

それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

(1ペテロ 2・9)

父と姉家族と二つ屋根の下に住むことは心強く、助けられています。家族の救いをお約束してくださっている主に大いに期待し感謝しています。

私たちは、今よりとこしえまで、主をほめたたえよう。
ハレルヤ。
(詩篇 115・18)

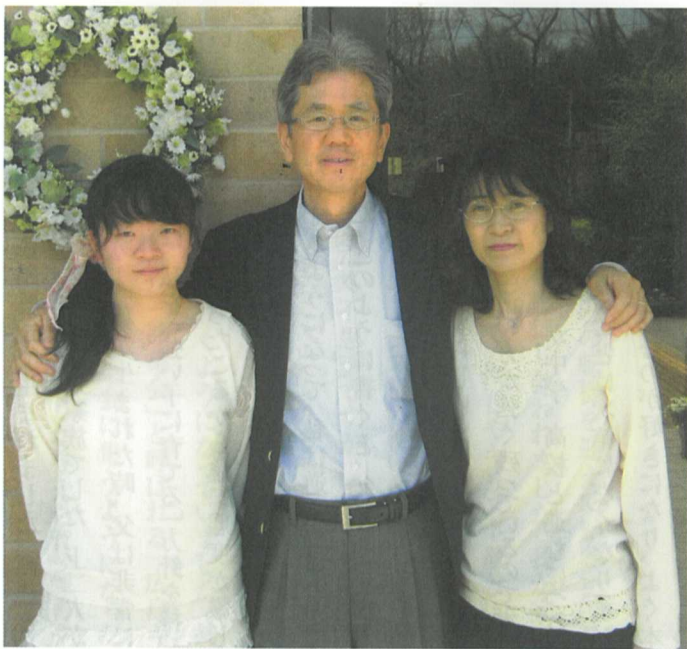
黒澤 環(くろさわ たまき)

一九六二年東京都国立市生まれ

桐朋女子中学高校、明治学院大学英文科卒、東京都公立中学校教員を経て、現在、私立高校講師

わたしはあなたの名を呼んだ。
あなたはわたしのもの

高橋 裕昭



左から長女の野乃花さん、裕昭さん、妻の裕子さん

1 若い日の救い

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわざ
いの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う
年月が近づく前に。
(伝道者 12・1)

私は現在五十八歳(二〇一六年現在)ですが、このみことばのとおりイエス様は私の若い日、十九歳の時にイエス様を信じるよう導いてくださいました。その導きは次のみことばのとおりでした。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいました。その大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたの私たちをキリストとともに生かし、あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。―あなたがたは、恵みのゆえに信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。(エペソ 2・4～5, 8)

私は一九五八年広島県呉市で生まれました。両親と、長女、次女、そして長男の私の五人家族でした。上二人が女の子だったこともあり、私が生まれた時、父は非常に喜んだそうです。父は、私を「強い子に育てる」方針を持っていたようで、小学校に入ったところから急に態度が厳しくなったことを記憶しています。このころから叩かれたり、怒鳴られたりするようになって、私は逆らうことができなくなりました。このように書くとき、父は怒ってばかりいたように思われるでしょうが、親としてのやさしい面もありました。ずいぶん父親らしいこともしてくれました。しかし、怖いという記憶の方が強く残っているのです。そういう父でしたが、私が中学、高校と進むにつれ、叩いたり、怒鳴ったりすることは次第になくなりました。た。そのころ、私は小説を読むのが好きになり、よく本を読んでいました。また、サッカー部に所属したり、友達と遊んだりと、まったく普通の生活をしていました。そんな青春時代、大げさな言い方かもしれませんが、私

に初めて人生の大きな転機が訪れました。

その転機とは、高校二年から始まった「倫理社会」の授業でした。この授業を通して宗教、哲学、思想などに触れて、衝撃を受けました。ソクラテス、プラトン、ブッダ、イエス・キリストらをはじめとする様々な先人たちの考え、生き方を通して宗教、哲学、思想などを学びました。そして、それまで自分が思っていたこともなかった「人が人として生きる」あるいは「人は人としての生き方がある」ということ、また「この人たちはどうしてこういうことを考えたのだろうか？」と衝撃を受けました。私はそれまで、「自分が人間として生きる」ということに疑問を持つことはありませんでした。それで、教科書に出てくる人たちが、人が生きる意味について模索し、答えを見出そうとしていることに驚いたのです。

この転機の後、私は哲学関連の本をよく読むようになり、「人とは何だろう、人が人として正しく生きるとはどういうことだろう」と考えるようになっていきました。

もし、あなたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。
(エレミヤ 29:13-14)

私がこのように人生の一つの転機を迎えているころ、長姉の高橋仁美がイエス様を信じ救われました。我が家はどこにでもあるような家庭で、聖書やキリスト教とほとんど無縁の環境でしたが、そんな中で最初に救われた姉が、それからは節目節目でイエス様の使いとなり、私を導いてくれました。まったく不思議ですが、イエス様が姉と私の歩みを導いてくださった、としか思えません。そのころから、姉と聖書の話をするようになり、いつの間にか、姉に誘われて家庭集会に行くようになっていました。姉が最初集っていた集会は「諸集会」と呼ばれる「広島キリスト集会」でした。その家庭集会に集うようになった私は、いろいろな兄弟姉妹との交わりが与えられ、聖書やイエス様の話を聞く機会が多くなりました。

家庭集会などの交わりを通して私は、「人は神様によつて創造された」、「人は罪を犯して神様から離れ、正常な状態ではない」、「人は罪人である」、「その罪を赦すためにイエス様が人としてこの世に来られ、十字架についてくださった」、「人はただそれを信じて救われる」、などなどのことを知りました。当時、人生上の悩み、苦しみ、不満などはありませんでしたが、次第に信仰に導かれ、高校から大学に入るころにはイエス様を受け入れていたように思います。少し前に引用したエレミヤ書のみことばの通り、私はイエス様を見出しました。すべてが主のご計画、一方的な恵みでした。

大学生になったころには、かなりはつきりイエス様のことを確信していましたが、ここで二つ問題がありました。私が信仰を持つことに、両親が反対したことです。冒頭に書きましたが、私は特に父が怖く、逆らってまで信じようという決心がなかなかつかず、長らく中途半端な状態が続きました。そのような私を後押ししてくれた

のが次のみことばでした。

からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。

(マタイ 10・28)

一九七六年、大学二年の十九歳の時、八月夏の暑い夜でした。聖書を読んでいてこのイエス様のみことばに出会ったとき、決心ができました。「両親を恐れるのでなくイエス様を信じよう」、そう決心した時の安堵感と喜びは今も覚えています。非常に嬉しかったです。

その後も両親は、私がイエス様を信じることに反対していましたが、私は姉に導かれて広島キリスト集會に集い、礼拝、聖餐に与るようになりました。そして一九七七年二月九日、バプテスマの恵みに与りました。

このようにして、冒頭の『伝道者の書』のみことばの

通り、イエス様は私の若い日に信仰に導いてくださいました。すべてが、主のご計画の配慮のうちに働き、すべてをよくしてくださったのです。救われたのはエペソ書のみことばのとおり、まったくの恵みでした。

2 信仰の破船、そして放蕩の日々

ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。

(1テモテ 1・19)

ところが、広島集會での喜びと感謝の日々は、長くは続きませんでした。信仰にはみことばの実行が必要と思ひ込み、できもしないことを一生懸命やり、次第に疲れ、それが重荷になっていきました。そして集會や兄弟姉妹との交わりから遠ざかるようになり、大学四年生のころには完全に離れてしまいました。「信仰の破船」に乗り、漂流するようになったのです。

それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。

(ルカ 15・13)

一九八〇年、このような状態で大学を卒業し、現在勤めている会社に入社しました。配属先は営業、勤務地は東京本社、ということでした。二十二年間生まれ育った広島を離れ、遠い国での生活が始まりました。希望勤務地は関西以西だったので、東京と決まったときは落胆しました。しかし、この「遠い国・東京」での生活は意外に楽しく、いつしか「信仰の破船」を飛び越して文字通り「放蕩の日々」になってしまいました。本社ということもあり、多人数で同世代の人も多く、にぎやかに楽しく日々を送っていました。二十二歳で上京し三十歳まで約八年間東京勤務をしました。この間の私の生活は次のみことばの通りでした。

また、彼ら(私)が神を知ろうとしたがらないので、

神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。

(ローマ 1・28)

しかしイエス様は、そんな私を見放さず、ご自身のご計画を着実に遂行しておられたと思います。私を導いてくれた姉は、私の在京中に諸集會を離れ、吉祥寺キリスト集會の広島集會に集うようになっていました。そしてイエス様は再び姉を通して、私に道を開いてくださったのです。

3 放蕩息子の帰還 吉祥寺キリスト集會へ

主は彼らの救い主になられた。彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。

(イザヤ 63・8〜9)

東京での生活が八年を過ぎようとしたころ転勤命令が出ました。転勤先は栃木県小山市の栃木出張所でした。所長、私、事務員という三人所帯のこの出張所は、にぎやかな東京本社との落差が激しく、非常に寂しかったです。しかし、それは静かな落ち着いた生活が与えられたことでもあり、主の前に静まる時間が必要だったのだ、と今は思っています。

一年が過ぎたころ、吉祥寺キリスト教会に移っていた姉が栃木に遊びにきました。そして姉は、小山市の最寄りの教会である土浦集会に日曜礼拝のために行くというので、私は車で姉を連れていきました。その時私は、姉を送ったただけですぐに帰りましたが、これが土浦集会と私の最初の接点となりました。

小山市での静かな生活が続くうちに、「私はこのままいいのだろうか？」という思いが強くなり次第に聖書を手に取るようになり、いつしか土浦集会へ足を運ぶようになっていました。一九九〇年ごろの話です。

当時土浦集会は青木ご兄弟が責任者で、めぐみ幼稚園の一室で集会が持たれていました。土浦集会では、吉祥寺から来られていたメッセンジャーの一人、野田繁兄と親しく交わっていただき、自分の思いを素直に話すことができました。野田兄からは「今度、軽井沢でバイブルキャンプがあるから来てみませんか」と言われ、キャンプにも導かれました。また土浦集会の兄弟姉妹は自然に受け入れてくださり非常に感謝でした。私も自然に入っていました。そして、「もう一度イエス様を信じて歩みたい」という思いが与えられ、再び聖餐にも与るようになり、気が付いてみるとそこは私の姉が集うようになつていた吉祥寺キリスト教会であり、広島と土浦という場所こそ違え、どちらもイエス様が導いてくださった集会でした。

土浦集会で聖餐に与るようになって一か月もしないうちにイエス様は次なる地を用意しておられました。静岡県富士市に転勤命令が出たのです。静岡県に転

勤してからは磐田集会に集い、その後はイエス様に従って歩んでおり現在に至っています。

4 主は決してご自分のものを見捨てられない

わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。

(ヨハネ 14・18)

私はイエス様を忘れ、自分の思いのままに歩んでいましたが、イエス様は私をお忘れになることがありませんでした。人生の要所所で姉をイエス様の使いとして送ってください道を開いてくださいました。「信仰の破船」に乗り、イエス様は受け入れてくださるだろうか？と迷っているとき、姉を通して、または野田兄や土浦集会の兄弟姉妹を通して、受け入れてくださっていることを示されました。イエス様はみことばのとおり、一度救われた者を決して孤児とはなさいませんでした。そして静かに導いて

くださった緑の牧場が、吉祥寺キリスト教会でした。これからもイエス様から目を離さず歩んでいきたいと思ひます。

わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。
(イザヤ 43・1)

高橋裕昭(たかはし ひろあき)

一九五八年 広島県呉市生まれ

広島県立音戸高等学校、

広島修道大学英語英文学科卒業

クレノートン(株)入社

(現在クレトイシ(株)に社名変更)

現在 クレトイシ(株)豊田営業所勤務

妻・裕子(ゆうこ) 長女・野乃花(ののか)

キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

[電話] 0422-21-8450 (集会所)

日曜礼拝・福音集会

10:00 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:00

中高生日曜クラス 9:00



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなぎ助けあつて重荷を分かちあい、すべてが自発的によるこびをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、

主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。

礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。

快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター

[電話] 0267-32-6400

長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

[電話] 0267-32-6444

長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

■ しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分(1000円程度)徒歩45分=3km

御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここににあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ —私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の存在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

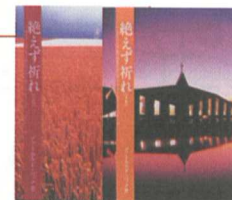
吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまでもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスの名によって祈る」、「祈りのかぎらない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる 第41号
定価100円（税込み）2016年7月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一 古田公人 田中順治 福留伸子 石塚稔成 石塚優子 岩本秀造 岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守格太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

集会の出版物